

「序」

地獄であれ、天国であれ、大したことじゃないだろうか？ 新しいものを見つけるために、深淵の奥底、未知の底に飛込むのだ。⁽¹⁾

ボードレールが、エドガー・ポーという『新しいもの』を見つけたのは、イザベラ・ムーニエ夫人の翻訳によってであった。彼は、「1846年か47年にエドガー・ポーの幾つかの小篇を知った」⁽²⁾時、彼自身の中に「信じられないほどの共感を引き起こしたアメリカのある作家を見出した」⁽³⁾のである。その瞬間に彼は次のように実感する。

「かなり奇妙ではあるが、そして私が認めずにはいられないことは、実証的に強調されているわけではないけれど、気質や風土を差引いても、私自身の詩とこの男の詩との間には内面的な類似性がある。」⁽⁴⁾

彼が、『内面的な類似性がある』と確信したアメリカの作家ポーは、「第二流のロマン派であり、散文作家としては、いわゆる『ゴシック小説』の後継者、詩においてはバイロンやシェリーの模倣者と思なされてきたと言っても不当ではないだろう」⁽⁵⁾と、本国では徹底的に酷評され、理不尽なほどに無視された作家であった。しかし、たとえ英米ではその影響は無きに等しい作家でも、ボードレールにとっては「毎朝、すべての力、すべての正義の源である神に、そして仲介者として、私の父に、マリエットに、そしてポーに祈りを捧げる」⁽⁶⁾存在となったのである。そこで彼は、フランスではまだ未知の作家であるポーを自国に紹介しようと決意してその作品の翻訳にとりかかった。しかしそうは言っても、「英語をまったく忘れてしまったので、この仕事をなおさら困難にさせている」⁽⁷⁾ことを自覚している彼にとって、その道は容易でなかったのである。だが「手探りで、目当てなしに、狂人のように仕事した」⁽⁸⁾結果、約17年間の長い年月にわたって、ポーの70数篇ある「物語」のうち40数篇も翻訳するという偉業につながるのである。そしてその仕事は、「エドガー・ポーを知らないフランスの友人達に、一種の新しい美を彼等の記憶の中にもたらしたことを、私は誇りに、かつ嬉しく思っているとりたい」⁽⁹⁾と、ボードレールが自負するまでの輝かしい成果となって実を結ぶ。

ポーがボードレールという最大の仲介者に出会ったのは、幸運であったと言いきべきであろう。もしボードレールというたぐいまれな信奉者が、フランスにポーを紹介しなかったら、ポーは文

学上の栄光をかちえることもなく、忘却の淵に沈められてしまったかもしれない。ポーは、同国人でなくフランス人の中に卓越した最高の文学的保護者をもった幸福を喜ばなければならないだろう。しかしボードレールがポーに一方向的に貢献したのではない。ボードレールもポーから受けたものは多大であろう。

ボードレール、エドガー・ポーは価値を交換するということ。二人はおのおのの相手の持つものを与え、自分の持たぬものを貰います。ポーはボードレールに斬新深奥な思想の一体系をそっくり引き渡します。これを啓発し、豊饒にし、多くの題目について彼の意見を決定します。詩作の哲理、人口的なものの理論、近代的なものの理解と否定、例外的なものとなる種の奇異さの重要性、貴族的態度、神秘、優雅と明確の趣味、政見すらも……。全ボードレールは彼に滲透され、靈感され、深められます。しかしこれらの財宝と引きかえに、ボードレールは、ポーの思想に、無限の広袤を得させます。彼はこれを未来に提出します。¹⁰⁰

ボードレールが、ポーから貰った『斬新深奥な思想の一体系』とは、『例外的なものとなる種の奇異さの重要性』ではなかったろうか。事実、ボードレールは、「異常な物語」と「新・異常な物語」を出版するにあたって、注意深く明確な二つの部類に分けている。サント・ブーヴに宛てた手紙で彼は、「第一巻は、ペテン、憶測、嘘報など大衆をひきつけるために構成されている。『リジア』は第二巻に精神的に結びついている唯一の作品である。第二巻は、幻覚、精神の病い、真にグロテスクなもの、超自然的なものなど、さらに高度な空想的なものからなっている。」¹⁰¹と述べている。ボードレールは、大衆をひきつける唯一の手段は、なによりも『驚かすこと』にあると確信していた。「驚かされた喜びの後に、驚きを語る喜びほど大きいものはない」¹⁰²と広言してはばからないボードレールにとって、ポーはまさにうってつけの作家と言えよう。『驚かされたり、驚かしたりすること』は、ボードレールの精神の根源的な基調なのである。

少しも形のゆがんでいないものは無感覚にみえる。——そこから不規則性、すなわち、思いがけないこと、驚かされること、驚かすことは、美の本質的な部分であり、美の特質であるという結論になる。¹⁰³

このボードレールの『驚愕』の精神こそが、彼に約1500頁にも及ぶ長期間の翻訳を続けさせた秘密を解く鍵になるかもしれない。「翻訳というものは、教えられる技術でなくて、翻訳された作家の気質の類似性を前提とする才能である。なぜならそこにその秘密がある。ボードレールが一生涯望んだのは驚かすことである。ポーのような独創的な作家を翻訳するのに必要なのは驚か

すことであった」¹⁴⁴ というルモニエの言葉は、まさに正鵠をえている。

「なぜ私が、そんなに辛抱強くポーを翻訳したか貴方はわかりますか。なぜなら彼は私に似ていたのです。最初に私が彼の本を開いた時、私は自分が夢想していた主題ばかりでなく、私が考えていた語句までが二十年も前に彼によって書かれていたのを、恐怖心と有頂点の気持で見たのです。」¹⁴⁵

ボードレールが、『夢想していた主題』や『考えていた語句』を、実際にポーの作品のどこに見い出したか、「異常な物語」を通して検証してみたい。浅学の身に英仏両国語の微妙なニュアンスの差異など知るよしもないので、ルモニエの解説を参考にして、英仏の文体上の差異、語法上の異同点など述べながら、あわせて翻訳には避けることのできない誤訳を指摘してみよう。ポーの作品に関しては、ハリスン編「エドガー・アラン・ポー全集」“The complete works of Edgar Allan Poe, edited by James A. Harrison, AMS Press Inc. New York, 1965.” ボードレールに関しては、コナール版、ジャック・クレペ、クロード・ピショワ編『シャルル・ボードレール全集』“Œuvres complètes de Charles Baudelaire, Editions Louis Conard.” ガルエニ版、「エドガー・ポー、異常な物語、ボードレール訳」“Edgar Poe, Histoires extraordinaires, Traduction de Baudelaire, Classique Garnier” を用いた。